

翻 訳

## 「僕が目撃したサンフランシスコ大震災」

J・ロンドン記

辻井榮滋訳&付記

地震がサンフランシスコを襲い、数十万ドル相当の壁や煙突をなぎ倒した。それどころか、それに続く大火災によって、数億ドル分もの財産を焼きはらってしまった。実際に生じた被害となると、数億ドル以内には収まらないだろう。

近代的な立派な大都市で、歴史上これほど壊滅状態に陥った所はない。サンフランシスコは消えてしまったのである。残っているものといえば、さまざまな記憶や郊外の住宅の周辺のほかには何もない。その産業地区は壊滅した。工場や倉庫、大きな店や新聞社の社屋、ホテルや大金持ちの立派な邸宅も、すべてつぶれてしまった。残っているものといえば、かつてサンフランシスコだった所の郊外の住宅の周辺だけである。

地震の衝撃後1時間もしないうちに、サンフランシスコが炎上している煙が燃えるように赤い塔となって、100マイル離れた所からでも見えた。そして三日三晩というもの、この燃えるように赤い塔は空に揺れ動きながら、太陽を赤くし、空を暗くし、地上に煙を行きわたらせた。

水曜日の朝5時15分に、地震は起きた。1分後には、炎がさっと舞いあがっていた。マーケット通り（サンフランシスコの街の中心部を北東から南西に向かって斜めに延びる大通り）の南側にある、労働者階級のスラム街の12ものさまざまな地区から火の手が上がった。炎に立ち向かうことなどできなかった。組織も通信網もないのだ。20世紀の都市の巧妙な調節装置のいっさいが、地震によって粉碎されてしまったわけである。街路はといえば、丸くなって隆起したり<sup>わづ</sup>凹地になったりし、倒れた壁の残骸が山と積まれている。鋼鉄製の手すりは、垂直や水平の角度にねじ曲がっている。電信電話網は寸断されている。それから大送水本管も破裂してしまった。人間の利口な仕掛けや安全装置といったものはことごとく、30秒に及ぶ地殻変動によってがたがきってしまったのである。

水曜日の午後、つまり12時間以内に、都心の半分は消えてしまった。そのとき僕は、このものすごい大火災を湾の外から眺めた。まったく穏やかだった。ひとそよぎの風も吹いていなかった。それでいて、四方八方から、風は街に吹きこんでいた。東西南北から、強風が救いがたい運命の街に吹いていた。立ちのぼる熱気が、ものすごい吸引力を生んだのだ。そういうわけで、火はひとりでにその場の空気を介して巨大な煙突を造ったのだ。昼も夜も、この風のない穏やかさは続いたのに、炎の近くでは、風はたびたび半ば台風であり、その引きこむ力ときたら強大であった。

水曜日の夜には、都心そのものが破壊された。ダイナマイトが惜しげもなく使用されて、サンフランシスコの誇り高い建造物の多くが人間の手でつぶされた廃墟と化した。炎が突き進んで

くるのを持ちこたえることはできなかった。たびたび消防士たちによってうまく<sup>さじき</sup>棧敷がこしらえられたが、そのたびに炎が回って両側から襲ってくるなり、後ろからわき上がってくるなりして、向きを変えてはやっとのことで手にした勝利を覆してしまうのだった。

破壊された建造物をいちいち数えあげたら、サンフランシスコの住所氏名録になってしまうだろう。破壊されていない建造物を数えあげれば、わずかに道ひと筋といくつかの住所ということになるだろう。英雄的行為を数えあげるとなると、図書館1つに入り、カーネギー<sup>メダル・ファン</sup>勲章基金を破壊<sup>は</sup>させてしまうだろう。死者の数を数えあげると——これは、もうとても無理だろう。死者の痕跡<sup>なん</sup>は、何もかも炎によって消失してしまった。地震による犠牲者の数も、決してわかることはないだろう。マーケット通りの南側は、人命の損失が特にひどかったが、ここが最初に火がついた所だった。

注目に値することかも知れないが、水曜日の夜は、街全体が崩壊しゴーゴーと音を立てて廃墟と化したのだが、静かな夜ではあった。群衆はいなかったし、叫び声もどなり色もなかった。病的興奮状態も無秩序なところもなかった。僕は、水曜日の夜に迫りくる炎の道を通りすぎていったが、そうした恐ろしい何時間ものあいだでさえ、泣き悲しむ女性も、興奮している男性も、恐怖に取りつかれている人も誰一人見かけなかった。

炎を前にして、夜通し、何万人もの家のない人たちが避難した。毛布に身を包んでいる人たちもいれば、巻いた寝具や大事な家財を運ぶ人たちもいた。時にはひと家族ぐるみで、財産を積んだ馬車なり荷物配達馬車を利用して、乳母車やおもちゃの荷馬車や手押し車といったものが運搬車代わりにされる一方で、その他すべての人はトランクを引きずっていた。それでいて、みんなの感じはよかった。この上ない礼儀正しさが認められたのだ。サンフランシスコの歴史上、この恐怖の夜ほど市民が親切で礼儀正しかった時は断じてない。

夜を徹して、これら何万人もの人々は、炎の前に避難した。その多くは、労働者階級のスラム街からの人々で、同様に終日避難した。彼らは、家財を背負って家を出てきていた。時折、何マイルも引きずってきた衣類や財産を通りに放り出しては、楽になるのだった。

人々は自分のトランクをこの時ぞとばかりに長く死守し、その夜はこれらのトランクに押しかぶさって大勢の丈夫な男たちが悲嘆にくれた。サンフランシスコの丘は急勾配で、こうした丘を何マイルにもわたって、トランクが引きずられた。いたる所にトランクがあり、それらと交差するように疲れきった男女の持ち主たちが横になっていた。炎が進行してくるのを前に、兵士の警戒線が配備されていた。そして一度に一街区も炎が進んでくると、こうした警戒線は後退した。彼らの役目の1つは、トランクを引っぱる人々を動かしつづけることだった。疲れきった人たちは、銃剣の威嚇にせき立てられて、立ちあがっては急な勾配の舗道でじたばたしながら、体が弱って5、6フィートごとに立ち止まる始末だった。

心臓破りの丘を登り越えてからも、たびたび、またあらたな炎の壁が直角に進んでくるのがわかって、もう一度退路を変えなければならなかった。ついには、疲労困憊の余り、12時間も巨人のように難渋しながら歩いたあげく、何千人という人々が自分のトランクを捨てねばならなかった。ここに至って、小売り商人や中流階級のきゃしゃな人々は、不利な立場に置かれた。それより労働者たちは、空き地にあちこち穴を掘って、トランクを埋めるのだった。

水曜日の晩の9時に、僕は都心を通って歩いていった。何マイルにも及ぶすばらしい建造物や

高くそびえる摩天楼のあいだを通りぬけた。そこでは火事はなかった。万事まったく整然としていた。警察が街路を巡回し、どのビルにも入り口に夜警がいた。それなのに、何もかもが絶望的だった。水がないのだ。ダイナマイトも尽きようとしていた。それに直角に、2つの異なる大火災が襲ってきていた。

午前1時に、同じ区域を歩いた。何もかもが依然そのままであった。火事はなかった。にもかかわらず、1つの変化があった。灰の雨が降っているのだ。入り口にいた夜警もいなくなっている。警察は撤退させられてしまっている。消防士も、消防車も、ダイナマイトを持って戦う男たちもいない。その地区は、完全に見捨てられてしまったのだ。

僕は、サンフランシスコの最も中心部のカーニー通りとマーケット通りの角のところに立った。カーニー通りには人けがない。6街区先では両側が燃えている。通りは炎の壁だ。そしてこの炎の壁を背に、くっきりと輪郭だけ見えるのが2人の合衆国の騎兵で、馬に乗り、冷静に待機している。それだけだ。ほかには誰1人見えない。損なわれていない都心には、2人の騎馬巡査が馬に乗って、見守っている。

完膚なきまでの降服であった。水がない。下水道は、もう長らく干上がっている。ダイナマイトもない。はるか山の手ではまた別の火事が発生して、今や三方から大火が襲っていた。もう一方は、その日の早いうちに燃えてしまっていた。その方向には、『イグザミネー』紙のビルや『コール』紙のビル(共にサンフランシスコの新聞社)、グランド・ホテルのくすぶり続ける廃墟、それに中が破壊され荒廃しダイナマイトで爆破されたパレス・ホテルがあった。

次には、炎が吹き荒れて、人間には炎がどこまで広がるのかの予想もつかなくなるだろう。水曜日の晩の8時に、僕はユニオン・スクエア(市内ダウンタウンの中心にある有名な広場)を通りぬけた。そこは、避難民たちでごった返していた。何千人もの人々が、草の上で寝ていた。政府のテントが立てられ、夕食が煮炊きされており、避難民たちは無料の食事を得ようと列を作っていた。

午前1時半になると、ユニオン・スクエアの三方が炎に包まれていた。残りの一方には聖フランシスコ・ホテル(パウエル通りをはさんで、ユニオン・スクエアの向かいにある高級ホテル)があるが、そこはまだ持ちこたえていた。1時間後には、上やら横からも発火して、聖フランシスコ・ホテルは天に向かって炎上していた。ユニオン・スクエアは、トランクが山と積み上げられて、人けがなくなっていた。軍隊も避難民も、すべてが退却してしまったのだ。

このユニオン・スクエアで、僕は1人の男が千ドル出すからひとつなぎの馬を提供してほしいと持ちかけているのを見かけた。どこかのホテルからトランクをうずたかく積んだトラックを任されていて、安全と考えられるこのあたりまで引っぱられてくると、馬が連れ出されてしまったのだ。炎がユニオン・スクエアの三方に広がっているのに、馬がないというわけだ。

やはりまたこの時だったが、トラックのそばに立って、僕はある男に避難するようしきりに言った。男は、いくつもの大火に取り囲まれるも同然だった。老人で、松葉づえをついていた。そしてこんなことを言った。「きょうは、わしの誕生日でな。夕べまでは、3万ドルの財産があった。わしの誕生日用にワインを5本、おいしい魚やそのほかにもあれこれと買った。ごちそうは食べておらず、持っているものはといえば、この松葉づえだけさ」

僕は老人に危険だからと言って、片足を引きずりながらも歩かせはじめた。1時間後、遠くか

ら見ると、トラック1台分のトランクが通りのまん中で浮かれ騒ぐように燃えていた。

木曜日の朝、5時15分、地震からちょうど24時間後のことだが、僕はノブ・ヒル（1849年のゴールド・ラッシュのあたりから、ダウントウンで一番高い丘ということもあって、成金たちが住みはじめた所）のある小さな住宅の階段にすわった。一緒にすわったのは、日本人、イタリア人、中国人、それに黒人——いささか多くの国の<sup>コスモポリタン</sup>の人から成る、この街の残骸の浮浪者たち——であった。このあたり一帯は、49年の大金持ちの開拓者たちの立派な邸宅ばかりだ。東に南にと、直角に、2つの強大な炎の壁が迫りきていた。

僕は、自分がすわっていた階段の家の持ち主と一緒に中へ入った。彼は冷静で、快活で、歓待してくれた。そして「昨日の朝」と切りだした。「私は、60万ドルの長者だった。今朝は、この家が手もとに残ったすべてさ。それも、15分したらなくなってしまおうよ」それから大きな飾り棚を指さして言った。「あれは、私の妻の中国の<sup>コレクション</sup>の収集物でね。われわれが立っているこの敷物は、贈り物でね。1,500ドルもした。あのピアノをちょっと弾いて、音色を聴いてごらん。あれと同じようなのは、まずないね。馬もない。15分すれば、火の手がやって来るだろう」

外では、旧マーク・ホプキンス邸（ノブ・ヒルの頂上にあつて、現在は高級ホテルの「マーク・ホプキンス・インターコンティネタル」）という立派な邸宅に火が付きだしていた。軍隊は後退して、避難民を追い立てていた。四方八方から、炎の轟音や壁が崩壊するすさまじい音やダイナマイトの爆発音が聞こえてきた。

僕は、家から出ていった。煙の<sup>とぼり</sup>帳越しに、夜が明けようとしていた。うす暗い光が、徐々にあたり一面に広がっていった。一度太陽だけが、煙の帳のすき間から現われ、血のように赤くそのいつもの大きさの1/4だけ姿を見せていた。煙の帳そのものは、下から見ると、うす紫色の色合いとともに沸き立ちのはためくバラ色であった。そのうち、藤色や黄色やこげ茶色に変わった。太陽はなかった。そうして、打ちひしがれたサンフランシスコに2日めが明けたのだった。

1時間後に僕は、市役所の破壊された丸屋根のそばをほうように通りすぎていた。この丸屋根ほど地震の破壊力を示すものはない。石の大半が大きな丸屋根から揺さぶられて、あとはむき出しの鋼鉄の骨組みが立っているばかりなのだ。マーケット通りには残骸が山と積み上げられ、その残骸をまたぐように市役所のひっくり返った柱が粉碎されて、短い断片になって交差していた。

街のこの区域は、造幣局と郵便局以外は、すでに果てしなく煙の上がる廃墟と化していた。そうした煙越しにあちこちから、ぐらつく壁のすぐそばを用心しながらほうように、時々男女が現われるのだった。それは、まるでこの世が終わった日のあとの少数の生存者たちの出会いのようであった。

ミッション通りには12頭もの雄牛が、きちんと1列に並んで通りをまたいで横たわっていた。ちょうど飛んでくる地震の残骸に打ちのめされたかのようにであった。火の手がそのあとを通りすぎ、牛たちを火あぶりにしてしまったわけだ。人間の死者たちは、火の手が届く前に運び去られていた。ミッション通りの別の所で僕は、ミルクを運ぶ荷馬車を見かけた。鋼鉄製の電柱が御者席をまともに突き破って、前輪を押しつぶしてしまい、ミルク缶が散乱していた。

木曜日の昼も夜もずっと、それに金曜日でも昼夜を問わず、炎は猛威をふるい続けた。金曜日の夜になって、炎はようやく押さえこまれた。とは言っても、ロシアン・ヒル（ノブ・ヒルの北側に位置し、19世紀には大勢の作家が居住。近くには、有名なロンバード通りがある。）とテレグラフ・ヒル

(ロシアン・ヒルの東方に位置する結構傾斜の急な丘。1933年完成のコイト・タワーがある。)がなめ尽くされ、3/4マイル(約1200メートル)にわたって波止場やドックがなめ尽くされてしまってからようやくのことであったのだが。

木曜日の夜にはヴァネス通りに、消防士たちの大きな<sup>さじき</sup>積敷が造られた。もしここで彼らが失敗に終わっていたら、残り数がかなり少なくなっている街の家々がもう一掃されてしまっていただろう。このあたりにはサンフランシスコの第2世代の立派な住居があって、ちゃんとした街区にあったこうした住居も火の手の向こう側でダイナマイトによって爆破された。あちこちで、炎が街区を飛び越えたが、こうした孤立した火は、主に湿った毛布や敷物を使って叩き消された。

サンフランシスコは、現在のところ、火山の噴火口のようになっており、そのまわりに何万人という避難民が野営の憂き目にあっている。プレシディオ(サンフランシスコの半島の北西端のゴールデン・ゲイト・ブリッジのすぐ南側に広がる緑あふれるエリア)だけでも、少なくとも2万人がいる。周辺の市はどこも家のない人々でごった返しており、それぞれの救援委員会が世話にあたっている。避難民たちは、行きたい所どこへでも鉄道で無料で運ばれ、10万人以上の人々がサンフランシスコの在る半島を出たものと推定されている。政府もこうした状況に対処しており、合衆国全体によってさし伸べられた即座の救助のおかげで、飢饉の可能性は皆無である。銀行家や実業家もすでに、サンフランシスコ再建の準備にあれこれ着手している。

#### 訳者ノート

日本は、地震が頻発する列島である。命名されている大きな地震だけでも、枚挙<sup>いとま</sup>に暇がないほどだ。大震災と言われるものでも、関東大震災(1923. 9. 1. マグニチュード7.9)があり、阪神淡路大震災(1995. 1. 17. マグニチュード7.2)はまだ記憶に新しく、そして最近ではあの東日本大震災(2011. 3. 11. マグニチュード9.0)が突発し、大津波と原発事故が絡んで大災害となり、いまだに大きな爪あとを残したままである。しかも、近未来的に巨大地震発生の確率がきわめて高いことが専門家たちによって指摘・予測されている。と思いきや、本稿執筆中の本日4月13日午前5時33分、拙宅(京都府南部)でも揺れ(震度3)を感じた。淡路島が震源地で、震度6弱という。これは、先ほど書いたばかりの18年前の阪神淡路大震災以来の震度6以上で、範囲は福井から近畿一円、四国・中国地方にまで及ぶ(京阪神および四国・中国で震度5~4)。……

大地震の発生は、何も日本に限らない。環太平洋造山帯と呼ばれる地域で広範囲にわたって起きている。近年では、チリやスマトラの地名がすぐに思い浮かぶ。スマトラ沖地震(2004. 12. マグニチュード9.0)とそれによる巨大津波では、30万人にも及ぶ死者を出した。また、太平洋の向こう側、アメリカは西海岸、サンフランシスコでも大地震は起きている。新しいところでは1989年10月の大地震のことを映像で記憶する人は多いだろう。

さて、前置きが長くなったが、今回訳出した「僕が目撃したサンフランシスコ大震災」(原題は“The Story of an Eye-Witness”)とは、1906年4月8日(水)午前5時14分、5分頃に発生した大地震(マグニチュード8.3)のことである。今から100年以上も前のことで、最初の揺れが40秒、2度目が25秒であったという。「僕」とは、当時の花形作家ジャック・ロンドン(1876-1916)である。ロンドン夫妻は当時、サンフランシスコの北方6、70キロにあるソノーマ谷のグレン・エレ



ンの地にいた。ソノーマ山の頂上まで馬で登って、サンタ・ローザやサンフランシスコに火の手が上がっているのを確認すると、午後にはサンタ・ローザを經由し、列車に乗ってサンフランシスコへと向かい、見るも無残な姿をあらわにした市街地を夜を徹して見てまわったのだった。

その惨状をつぶさに描きとって報告したのが、この記事である。大地震発生から3週間足らず、いまだ悪夢から覚めやらぬ1906年5月5日に『コリアーズ』誌に掲載されたものである。文字通りに訳せば、「目撃者の話」だが、本稿ではより具体的に標記のものとした。被災者たちの身なりや言動等が手に取るようになまなましく写しとられており、結果として当時の様子が貴重な資料として後世に残された。とりわけ地震大国日本のわれわれにとって、学ぶべき点が多々あるように思われる。

なおこの大震災は、ロンドン自身にも大きな痛手を与えるものとなった。農園の家畜小屋の土台等が壊れてしまったことがその1つ。もう1点は、夫婦で自前の船による7年がかりの世界一周を計画していたのが、この震災で予定が大幅に狂ってしまったことである。当初は1906年10月の出航予定だったのが、あれやこれやの不具合に加えて、この大地震による数々の災難が重なり、さらには同年12月の出航予定が、ついには翌1907年4月23日まで延びのびになったのであった。必要経費も嵩む<sup>かさ</sup>一方であったことは言うまでもない。

補記：大地震はまだまだ続く。中国・四川省では、2008年5月にマグニチュード8.5の規模のものがあって、8万7千人もの死者を数えた。と思えば、つい最近（2013. 4. 20.），同じ四川省でマグニチュード7.0の地震があって、4月21日現在で死者186・行方不明者21・負傷者1万4千人との報道（京都新聞）があった。また、これも最近4月16日には、イランの南東部でもマグニチュード7.8の大地震が襲っている。……